

様式（第3条関係）

東京都とうきょうすくわくプログラム推進事業活動報告書

所在地	墨田区立川4-6-6
園名	ベネッセ 菊川保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

積み木で遊ぼう

<テーマの設定理由>

年長児が積み木で遊ぶ中で、材料が足りなくなったり、年下児に作品を壊されてしまうことが続き、「もっと積み木がほしい」「邪魔されずに遊びたい」という声が上がっていた。その思いに応え、まずは年長児が満足するまで遊び込める環境を整えることで意欲を取り戻し、その姿を通して異年齢で自然に関わりながら積み木遊びが広がっていくことをねらいとして、このテーマを設定した。

2. 活動スケジュール

令和7年夏、年長児と一緒にどんな積み木がよいかを選び、その後発注していた積み木が届いた。室内での活動が増えたこの時期をチャンスととらえ、積み木遊びを意図的に仕掛けた。初めの約3週間は年長児のみで遊ぶ時間を設け、積み木を組み合わせたり、並べたり、光を当てて影の変化を試すなど、まずは素材そのものを楽しむ姿が見られた。その後、夏の体験をもとにした町づくりが始まり、子どもたちは夢中になって電車や町の様子を再現していった。ある程度形ができた段階で、子どもたちが絵を描いて壁に貼り、積み木の町と合体させて作品として完成させた。この様子は9月の夏祭りで掲示した。その後、年下児が興味を持ち始め、積み木コーナーで遊ぶ姿が見られるようになった。現在では、一人で遊び込む姿や、異年齢・同学年・性差に関係なく関わりながら遊ぶ姿が続き、積み木遊びが広がりを見せている。

3. 活動のために準備した素材、道具及び環境の設定

積み木・懐中電灯・模造紙・クレヨン

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

年長児と一緒に積み木を選び、どのように遊びたいかを想像しながら活動を進めた。子どもたちは積み木に光を当てて影を楽しんだり、壁に映して形の変化を見たり、他の玩具と組み合わせたりするなど、自分なりの工夫をしながら遊びを広げていった。

遊びが深まるにつれ、自分の経験や見たものを積み木で再現する姿が増え、映画館、ショッピングモール、ライブ会場、駅、鉄道、川など、さまざまな場面が形づくられていった。また、子どもたちが描いたイメージ画を壁に貼ることで発想がさらに広がり、積み木コーナー全体が活性化した。活動を重ねるうちに、子どもたちは集中して遊び込む姿が見られるようになり、積み木を通して対話したり、協力したりしながら遊びを発展させていった。

年長児は集中して遊び込み、満足が高まると、「そろそろ年下の子にも開放しよう」と自分たちで話し合い、積み木コーナーを年下児に開放することを決めた。その後は、年下児が興味をもって遊びに加わる姿が見られ、現在では一人で夢中になって遊ぶ姿や、異年齢・同学年・性差に関係なく関わり合いながら遊ぶ姿が続いている。

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

年長児は、自分たちが集中して遊べるように話し合い、積み木コーナーに貼る張り紙を自ら作って掲示した。積み木に光を当てて影の形を試したり、友だちと相談しながら遊び方を工夫したりする姿も見られた。また、夏休みに祖父母の家で見た電車や町の様子を積み木で再現するなど、実体験を遊びに取り入れる姿が広がった。

その様子に刺激を受けた他児が、自分の体験した映画館やスタジアムを積み木で表現し始め、子ども同士のイメージがつながっていった。保育者が「町の絵も描いてみる？」と提案すると、子どもたちは大きな絵を描いて壁に貼り、積み木の町と合体させてさらに遊びを発展させた。

保育者は、子どもたちが自分の「やってみたい」「作りたい」という思いを自然に表せるよう、必要以上に介入せず、子どもの発想が広がるタイミングでそっと提案を行いながら見守った。その結果、年長児は十分に遊び込んで満足すると、「もう開放してもいいよ」と年下児に声をかけ、一緒に遊ぶ姿が自然に生まれた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た職員の気づき>

今回の取り組みを通して、子どもたちの「作りたい」「やってみたい」という思いが遊びを大きく動かす原動力になることを改めて実感した。年長児が素材に触れ、光を当てて影を試すなど、積み木そのものを探求する時間を十分に確保したことで、遊びが深まり、実体験をもとにした町づくりへと発展していった。

また、環境のつくり方が子どもの姿を大きく変えることにも気づかされた。年長児だけで遊ぶ期間を設けたことで、安心して集中できる場が生まれ、子ども同士がイメージを共有しながら構想を広げていく姿が見られた。その姿は年下児にとって憧れとなり、これまで積み木に興味を示さなかった子どもにとっても「やってみたい」と思うチャンスとなった。

興味の薄かった子どもが積み木コーナーに足を運び、一人で夢中になって積み上げたり、年長児に声をかけて一緒に遊び始めたりする姿は、積み木が子ども同士をつなぐ強い媒介となっていることを示している。異年齢・同学年・性差に関係なく関わりが広がり、探求心をもって遊び込む姿が継続していることは、環境構成の効果と子ども自身の成長の両面を感じさせる。